

小児のインフルエンザ 2009 肺炎の臨床像

鶴澤 礼実¹⁾ 北野 陽子²⁾
城谷 吾郎²⁾ 廣瀬 伸一²⁾ 小川 厚¹⁾

¹⁾ 福岡大学筑紫病院小児科

²⁾ 福岡大学医学部小児科

要旨：2009年シーズンに流行したインフルエンザ 2009（当時の名称は新型インフルエンザ（H1N1））で2009年5月から2010年4月に福岡大学筑紫病院小児科に入院した症例の臨床像について検討した。入院症例は49例のうち肺炎合併例は16例だった。肺炎合併例の年齢分布は平均5.5歳で幼児期後期から学童期が多かった。入院時のSpO₂ 95%未満の低酸素血症の症例が半数以上あり、比較的重症でメチルプレドニンもしくはプレドニゾン投与を要した症例も半数以上であったが、人工呼吸管理を要した症例や、死亡例はなかった。平均入院期間6.9 ± 2.7日であり、入院時の重症度からすると比較的速やかに軽快した。インフルエンザ 2009 流行以前の時期に当科に入院した季節型インフルエンザの肺炎合併（0-15%）に比べ、インフルエンザ 2009 では肺炎合併が多かった（32.7%）。インフルエンザ 2009 では肺炎合併が多く、季節型と比べて重症化することが知られており、慎重な対応が必要と思われた。

キーワード：小児，肺炎，インフルエンザ 2009，新型インフルエンザ，合併症